

難有仕合の旨各奉拜謝候て、先づ御屏風の後へ退出、此所に控可申旨兩人指圖、追付於表御座の間、三人一同に御前へ誘引、件の趣申渡候の處、難有奉存旨筑後御禮申上候處、何も入情相勤候に付、御加増三百石宛被下候。彌無油斷可相勤旨御誼有之、重疊難有仕合の旨、筑後御請申上各拜伏候て退出す。某被召出既十九年に及ぶ。朝暮近侍如此の段、冥加の至銘肝膽且はまた往々近侍はすまじき事、相如藏人かうぶり給ひてける時、よみ侍ける古ことそゞろに思ひ出で侍りけり。其歌は。

年經ぬる雲井離れて葦たづはいかなる澤に住まむとすらん
晦日。克明並某稱號依仰改之。克明號新藏某號權佐、各捧鳥目百疋御禮申上了。

一、松月寺へ詣でて
十月二日松月寺先考牌前へ參拜、獻青銅貳百疋。つくくと懷舊數回に及ぶ。

かばかりの身の嬉しさを告來ても空しく袖に露ぞ零るゝ
一、身上を省て偶成
十五日。此頃省身上而恐怖盈滿、詠一首之蜂腰。

いや高き君の恵にみちぬれば空おそろしき身の行衛かな
一、觀月亭の落葉を詠す

二十七日。於觀月亭詠落葉。

冬艸を時雨に染る落葉かな
冬枯の庭のちぐさも色かへつ雨とふりしく四方の紅葉に
一、雪を詠す

十一月十八日。

花とみむ程こそなけれ霜がれの草葉にかゝるゆきの下露
吳竹の花とも見しかいつしかにつきて軒端をうづむ白雪

山路雪

こりつみて歸る山路に雪ちればたをらぬ花をかざす柴人

遠山雪

重れる雲かと思しを空晴て雪にぞしるしをちのやまの端

山家雪

分け迷ふ道もいとほすとふ人のかへさをいかに雪の山里
降積し落葉の上の今朝の雪きえずしあらば告て見ましを
一、歲暮の心を
春をまつ心のそこよ動かすばいかに今夜を惜みはつべき

三十あまり五の年もくれはどりあやなく過し月日なる哉
かくしつゝ終にきゆべき露の身を思ひ思はぬ年の暮かな

一、元旦人丸の像を拜して
辛未元旦。入觀月亭上香拜柿本人丸像試毫。

賀をくはふるくにの時津風のどけきまつ千代の初はる
今朝はまづ心の花の紐とけてやまは霞のころもきにけり
立春

春きぬと軒のしづくに音づれて朝戸出かすむ雪の山の端
一、早春梅を詠す
二日。早春梅。

雪ふれば咲ぬ立枝もなかりしか春こそ梅の匂ひなるらん
ちひろあるかけや色そふ松の春
伊勢物語の歌を以て爲本歌。

明て今朝かすめる外に山もなし
一、諸家歳首の作
五十川剛伯歳首之作

殘夜鐘邊盡、喚醒舊歲夢。寒光松竹外、禽語雪花中。北海
恩波瀾。南山壽色融。揮毫何所樂、吟詠坐春風。

室直清歳首之作

城西卜築愛幽遠。白屋迎新眺望。天上雲霞分晦朔。人間水雪阻驚花。百年身耻彫蟲枝。竟日門無長者車。自是閑來春誦好。爲欣青帝到儒家。

小瀬助信歳首之作

歲月更端昌曆開。大和融液日應催。城頭樹色雲呈瑞。郊外山光雪作堆。清代由來無棄物。恩波遍處愧非才。滿盤菜酒聊隨俗。屢祝華封舉壽杯。

本多政冬歳首之作

夙起上金城。祥雲和雪明。退公酌椒酒。依舊待新鶯。淺井源右衛門政右
天地のあまねきめぐみ白雪のかゝるした草春に逢ふらん
けふをよつときはかきはの初かな

山崎半左衛門延隆

仕へこし身は老にけり新玉の年の緒ながく君をあふぎて
雪ながら年は越路の霞かな
一、春立つ日に

八日。立春。